

## 2024年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏名
経営学部 地域ビジネス学科	教授	原 京二
最終学歴	学位	専門分野
中央大学経済学部経済学科	経済学士	メディア

### I 教育活動

#### ○理念・目標・方針・計画（方法）

##### 【理念】

急速に変化をしている社会の多様な価値観を学ぶことにより、学生が自らの学びと人生を肯定できるように学生に伴走する。

##### 【目標】

価値観が多様化する社会において以下の3つの力を備えた学生の育成を目指す①社会の中で良好な「信頼関係を構築」できる学生の育成。②「聴く力と問いを立てる力」のある学生の育成。③フィールドワークを通して「主体的に行動」できる学生の育成。

##### 【方針】

学生との日常的なコミュニケーションの強化を図り、課外活動や外部の専門家との接点を増やすなど、学内に留まらない学びの場を学生に提供する。

##### 【計画（方法）】

講義科目の授業では①映像資料などの活用②最新事例を交えた解説③グループディスカッション等を取り入れ、教員と学生の双方向な授業を行う。また演習では、多様化する社会に対応するために①外部の専門家との接点を増やし多様な価値観に触れる機会をつくる②課題を見つけ、その課題に問いを立てて、仮説を立てる力を身につけるために、グループワークによるプレゼンテーションを繰り返し繰り返し行う。

#### ○担当科目（前期・後期）

##### （前期）

基礎演習Ⅰ、総合演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、コミュニケーション論、ブランド構築論

##### （後期）

基礎演習Ⅱ、総合演習Ⅱ、専門演習Ⅱ、リーダーシップ論、東邦プロジェクトC

#### ○教育方法の実践

学生が多様な価値観に接する機会を増やすために、全ての授業において外部の専門家をゲスト講師（放送局の報道局特別解説委員、大手広告代理店のブランディング戦略の立案責任者、新聞社の編集センター長、元放送局のアナウンス部長、キャリアコンサルタント等）として招く授業を実践した。そして教員と学生との双方向な授業を実践するために可能な限りグループワークを取り入れ、授業内で学生が自ら考え発言する機会を増やした。

また、東邦プロジェクトCは地元のFMラジオ局2社にご協力をいただき、学生がメディア環境の最新事情についての講義を受けた後に、グループワークとして新しいラジオ番組の企画書を作成し、FMラジオ局の経営陣に対してプレゼンテーションを実施した。グループワークとプレゼンテーションを中心としたフィールドワーク型の授業として学生は意欲的に取り組むことができた。

## ○作成した教科書・教材

全ての授業においてオリジナルの講義資料を作成し、学生には適宜配布した。

## ○自己評価

実務家教員として理論と実践の融合を活かした授業を心掛けた。特にゲスト講師による授業は、学生からの質問等により学生の新たな一面を知る機会となり、教員として学生との関係を構築する際のコミュニケーションを向上させる一助となった。双方向型の授業としてグループワークを取り入れたことは学生の自主性を引き出すうえで効果的であったが、学生数が 100 名を超える授業では、グループワークが散漫となるケースが見受けられたので、学生の席を固定化し 70 名～80 名程度の学生数で実施することがより効果的であった。また、総合演習と専門演習においては、課題に対して学生が学内の教員にインタビューをして資料をまとめてプレゼンテーションをすることを指示した。インタビューをすることは傾聴を学ぶことと、「問い」の良し悪しが資料作成、論文作成に繋がることを知る貴重な機会となり、学生には今後の論文作成等に活かせる良い経験となったと感じた。授業全般としては、知識の習得だけに偏らない、自らの考えを言語化して表現することのできる学生の育成を心掛けた。その結果の一つとして、より深く思考したいという学生とともに定期的な読書会を開催するに至った。今後も継続的に開催して学生の参加者を増やしていきたい。

## ○研究課題

地域メディアによる情報発信のあり方についての研究

## ○目標・計画

### 【目標】

所属する情報通信学会、社会情報学会、日本メディア学会、日本広報学会の学会誌への投稿

### 【計画】

頻発する地震などの災害において、地域メディアがどのような情報を発信し、地域の安心安全に寄与できるのかは国内メディアの重要課題である。今年度は、世界的な潮流として災害時に活躍をしている低軌道衛星が地域メディアの災害情報にどのようなインパクトをもたらすのかについての研究を大きなテーマとして活動する。

## ○2017年4月から2025年3月の研究業績（特許等を含む）

### （著書）

- ・一歩先へススメ（プロジェクト責任者としての共著 丸善出版 2020年7月）

### （学術論文）

- ・放送局のブランド戦略に関する考察（日本広報学会「広報研究」第24号 2020年3月）
- ・地域の情報発信力を高めるテレビ放送ネットワークの再編について  
（情報通信学会学会誌「Vol 40」査読付 2022年6月）

### （学会発表）

- ・なし

### （特許）

- ・なし

### （その他）

- ・日本ケブルテレビフェスタ 2024にて研究内容の講演「地域メディアの役割」（2024年10月）

・情報通信学会国際コミュニケーションフォーラム参加（2024年6月）

「能登半島地震における現時点での情報流通を検討するべく、「能登半島地震 震災対応で放送・通信は進化しているか」について議論し、大規模震災時におけるインフラ、プラットフォーム、端末、コンテンツの在り方等についてのディスカッションを行った。さらに、検討をふまえて政策的な提言を行うことを視野に議論を深めた。

・能登半島地震における低軌道衛星（スターリンク衛星）の役割と情報について衛星アンテナを提供した KDDI へのヒアリングを実施（2024年9月）

「能登半島地震では KDDI がスターリンク衛星アンテナを初めて災害地域に提供し、通信の確保をした。通信が確保されたことで、どのような災害情報がどのように発信されたのかについてヒアリングを実施し貴重なデータ等を得た」

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

・なし

○所属学会

・情報通信学会、社会情報学会、日本広報学会、日本マスメディア学会

○自己評価

災害時における地域メディアの役割は、この地域に南海トラフ地震が迫る中、重要が増している。地域メディアが、どのような情報を、どのようなプラットフォームを利用して地域発信するのかについて、能登半島地震における事例を参考として、特に低軌道衛星の役割についての研究が進んだことは一定の評価ができる。その一方で、この研究分野における 2024 年度の科研費基礎研究（C）の申請が不意採となったが、引き続き申請を行い、研究をより深化させた報告を学会等で発表していきたい。

### III 大学運営

○目標・計画

【目標】

新たに発足した IR 推進委員会の委員として客観的データに基づく分析を行い、教職員が必要とするデータを作成し、大学が掲げる課題への処方箋を提供する。

【計画】

課題への処方箋を間違わないように、何のためのデータ分析か、誰のためのデータ分析か、絶えず委員会の中で確認する。また外部の有識者や教育機関からの情報収集を丁寧に行う。

○学内委員等

当初は IR 推進委員会所属であったが広報委員会の委員に変更となった。

○自己評価

入試広報に関連した学生募集のコミュニケーション戦略を立案し入試広報課と連携して実施した。コンテンツとして「学生が語る愛知東邦大学」「ハカセと話そう」等を始め、入試広報に資する動画コンテンツを企画作成した。また、入試広報のパンフレットについても大学として受験内等のステークホルダーに訴求したい重要ポイントを明確にして作業を進めた。

#### IV 社会貢献

##### ○目標・計画

###### 【目標】

SDGs を意識した産学連携もしくは他大学との連携を図る。また、自分が研究として取り組んだテーマの成果について講演等の形式等で地域に還元する。

###### 【計画】

起業家意識の高い学生がいるため、産学連携の一つとして、学生と起業家、学生と企業の接点が多く持てる機会を提供する。

##### ○学会活動等

所属する情報通信学会におけるシンポジウムやフォーラムに参加して研究分野における知見は深めたが、他大学との連携についての道筋をつけることができず次年度の課題としておきたい。

##### ○地域連携・社会貢献等

\* 高大連携として東邦高校人間健康コースの学生に対して「ブランディング」の授業を実施。

(2024年5月)

\* 愛知県の高校生を対象とした愛知サマーセミナーにて「ニュースの読み解き方」の授業を実施。

(2024年7月)

\* 高大連携として東邦高校普通科の学生に対して「SNS時代のニュースの見方」の授業を実施。

(2025年2月)

##### ○自己評価

他大学との連携について具体的な活動ができず次年度の課題としたい。また産学連携の形の一つとして企業におけるインターン等についてゼミ生等が関われる機会を創出し、今後は学生と地域との接点を増やしていきたい。

#### V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

国家資格「キャリアコンサルタント」を有しているため、特に学生のキャリア形成における専門的知識、実践的活動を活用して学生のキャリア支援を実施した。

#### VI 総括

赴任一年目の2024年度は学生のレベル感、授業への関心度、社会への関心度等を探りながら対応する試行錯誤の年であった。結果として学生の授業への関心度が、大きく二極化していることを把握できたことは大きく、次年度に具体的な対応を施したいと考える。また、できる限り大学が主催する地域イベントに参加してその課題等についても認識できたので今後は学内の関係者にフィードバックをして、大学と地域社会との関係強化の一助としたい。また、学習意欲の高い学生とは、研究室にて定期的な読書会、他大学の見学等を通して、普段では学生から得られない貴重な意見や考えを聞くことができた。こうした意欲の高い学生に対しては「学ぶことの面白さ」、意欲の低い学生に対しては「学ぶことの意味」を伝える努力を継続し、私のクレドである「一緒に、常識を越えていきましょう。」を今後も具現化していきたい。